



スポーツと人・文化・文明 (老いからの道標)

中村純二先生の「正反合と進化」から考える・・・の続き

田中文夫 (神奈川県)

「死の断絶」は多様な文化様式を生み出しましたが、自然の中で安全を担保し、死生観を伴わない身体的行為へと移行してゆくと、その行為は「スポーツ」と呼ばれる分野へ展開されてゆきます。「正・反」世代の死生観をともなった登山と、「合と新」世代の死生観をともなわない登山との比較は、相(層)を異にして比較する意味を失います。比較するのではなく、世代変遷の理解と、新たな展望への考察こそが、未来社会へ意味付くこととなるでしょう。身体においても、知能においても、その比較競争は今後ますます、「スポーツの様相」として進化・展開されてゆくことでしょう。

では「スポーツの定義」とは、いかなるものでしょうか。まず私が考える定義を提示しておきます。「スポーツとは、安全を担保した環境の中で心身により、自己と自然との対峙、または他者との競争・競技により、自己を再確認する行為とその記録」。1968年、国際スポーツ・体育協議会(ICSPC)「スポーツ宣言」において、「スポーツの定義とは、遊戯の性格を持ち、自己または他人との競争、あるいは自然の障害との対決を含む運動」とされています。近代スポーツの特徴は、①教育的性格、②禁欲的性格、③倫理的性格、④知的・技術的性格、⑤組織的性格、⑥都市的性格、⑦非暴力的性格、をあげられます。近代社会における人々のライフスタイルにとり、スポーツは基本的に好ましいこととされます。古代ギリシャ、ローマ時代にも「スポーツ」が存在していたといわれるように、広い意味でのスポーツ的な営みはあらゆる文明において見出され、それぞれの文明や時代、社会の特徴を帯びながら、文化とする共通性をもって世界中に遍在してきたものと考えられています。スポーツをめぐる文化論において、スポーツは3段階のピラミッド構造に分ける考えがあります。最下層は「物質文化」としての物的用具(用具、施設、衣服等)、中間層は「行動文化」としての技術体系(各種目の技術)と規範体系(ルール、フェアプレイ精神、スポーツマンシップ等)、上位層は「観念文化」としてのスポーツ論としています。ではスポーツを特徴づける中心要素は何でしょうか。それは「記録」にあると云えます。

「記録」が示す時間、距離(長さ、高さ)、重さ、回数といった数値要素は、物理因子そのものであり、競技における客観的比較を可能とします。数値データを比較し、優劣を競い、その中で優れていたいとする人間の欲望が育まれます。そして「記録を求め、他者に優越する欲求」は、人間の闘争本能を満たします。人間の闘争本能は、戦争から遊戯に至るまで様々に類別できます。

スポーツの初源を「遊戯」に求め、その成果を『ホモ・ルーデンス』にまとめたのはヨハン・ホイジンガでした。「遊戯」の根源を探り、文化としてスポーツを取り込んでいます。冒頭の「序説」において、『遊戯は、ここでは文化現象として捉えられる。生物学的機能としてではない。』として、「遊戯⇒文化」をまず主張しています。さらに文化現象と生物学的機能とを分けて考えていることに対し、「文化現象⇒欲望の充足機能⇒文化」と「生物学的機能⇒欲求の充足機能⇒文明」という補助説明を付け加えてみます。部族集団生活の古代から都市・国家生活に至る現代まで、人類の闘争本能は「遊戯⇒文化」の意識範囲において平和理に活用されてきました。単純に個と個がジャレ合う遊びから、統治の潤滑油(ガス抜き)となるまで、日常に組み込まれてきました。それが「遊戯」の文化意識範囲を超えてしまうと、「戦争(闘争)⇒文明の興亡」へと進んでしまいます。「遊戯⇒文化」の意識普及は、「戦争(闘争)⇒文明の興亡」への抑止力となれるのです。

では、「記録を求め他者に優越する欲求」を、次の3段階として考えてみましょう。

文脈 ①：対自欲求 （正の登山：文明的要素）

「自己として記録を求める欲求」は、文明進化と方向性を同じくする生存の必要条件に属します。この欲求は自然人として持って生まれた、未知なるものを知りたいという知的本能欲求があり、自己または人類とする単一視野にたった「対自欲求」となります。この対自欲求は限界へ迫り、限界を知り、その限界領域を次々と記録更新する文明の位相に属するものと云えます。いわゆる「正の登山」です。

文脈 ②：対他欲求⇒対自欲望 （反の登山：文化的要素）

「記録によって他者に優越する欲望」は文化として、価値の多様な表現様式でもあり、生存にとつての十分条件に属します。他者と共生する社会の中で、他者との比較(競技)によって他者よりも優越したいという欲望を満たす、感性(心)をとまいません。この「対他欲求」は「欲望」という言葉に置き換えたほうが、その意味を適切に反映します。「反の登山」の立場です。この欲望が抑圧される社会にあつては、教条主義的フラットな文化となり、「欲望」を自由に発揮できる社会にあつては、人々が多様な文化の花を開かせるわけです。さらに「人が感じる美」とは、他者よりもほんの少し優れていることの中にあると云われます。大きくかけ離れてしまうと不安定で孤高な存在となり、美しい存在ではいられないのです。

文脈の合成：文脈① + 文脈② ⇒ 複素的世界観 （合と新の登山：複素的要素）

文脈①と文脈②の、文明要素と文化要素は「実な社会」に現れるとともに、他者から見えず伝えにくい「知的本能(知性)、感性(心)」という「虚な社会（抽象の世界）」が隠されています。「正・反」の平面二次元構造に「虚な社会」を加え、新たな「合と新」の立体三次元構造、「複素的世界構造」を考えてみると、より理解が進みます。外部から見えず、他者に伝え理解されきれない「知性と心」からなる「虚な社会」は、私たち一人ひとりの心身の内にあります。その一人ひとりによって家族、職場、地域、国家、世界が構築され、その構成は身体によって体現される「実な社会」と、目に見えない「意識(知性+感性)」からなる「虚な社会」との複合体となります。それを数学の複素数に読み替えた言葉が、「複素的世界」としてみました。「合と新の登山」は、新たな三次元認識をとまいません。それゆえに「実の社会」だけでない「虚な社会」の比重が増し、見えない、伝えきれない、意識の世界をどのように表現し、他者と共有できるのか、新たな社会の理解と整理が不可欠となります。

「合と新」の「複素的表現記録」は難しく、「正反の登山」にとっては理解しがたくなります。しかし実態は、心性よりも身体性の客観記録に集約されるスポーツとなるのでしょうか。そこで大切なのが「正反」から「合と新」へ至る歴史の橋渡し、文化と文明進化の中に正しく位置づけることではないかと考えます。

近代社会はこれまで、科学的実証主義による進化を果たしました。「虚な社会」、「抽象の世界」は科学的実証性に欠けるとして、排除されてきました。現代、その科学のもたらす技術力は格段に進化し、人類の制御・抑制能力を超えるまでに至っています。核分裂・核融合エネルギー利用と制御の限界、核利用の廃棄物処理、遺伝子操作による複製生命と再生医療による「自然の生死、寿命と人工生命の問題」等々、人類の制御限界を超えたシステムを運用手がけています。そのことは文明の進化が人の意識まで変え、これまで自然としてきた環境に人の意思が手を加え、自然の循環復元限界を超えた作用となってきたことにあります。文明の進化を見過ごさず、文化の力を発揮する時は、今です。

人工生命や人工知能、再生医療などの文明技術は、「自然な生命」がもたらせてきた一回限りの“はかなさ”という情緒的感覚を失わせます。そのことは、これまで山岳体験の中で大きな重みを成してきた「死生観」を不要とし、安全を確保して競う「スポーツ」そのものの文化へと移行してゆくこととなります。「反」の世代の論者としては寂しい限りですが、この時代の変遷の理由(わけ)を少しでも解明しておくことが、『老いからの道標』となれるのではないかと思案するものです。